《論　　説》

「背教者」ユリアヌス帝登位の背景

―紀元4世紀中葉のローマ帝国に関する一考察―

南　川　高　志

【要旨】

後に「背教者」と呼ばれるローマ皇帝ユリアヌスは，副帝として赴任したガリアにおいて，360年に軍隊により皇帝に擁立された。幼い頃から皇帝コンスタンティウス2世の監視下で，政治・軍事から切り離されて過ごしてきたユリアヌスが，ガリアに赴いて後，ライン川を越えて侵攻してきたアラマンニ族やフランク族を打ち破り，荒廃していたガリアを再建するなどめざましい働きをしたことが，その登位の背景として説明されてきた。しかし，かかる説明に対しては，ユリアヌスに同情的な伝統的解釈に対する疑問に加えて，ユリアヌスの赴任時にガリアが荒廃していたとする前提にも近年疑問が提示されるなど，再考すべき点がいくつもある。本稿では，ユリアヌスのガリアでの行動を検証することを通じて，4世紀中葉のローマ帝国の国力の一端を理解することを目指した。その際，ローマ側から眺めるだけでなく，彼と対峙したライン沿岸地域の諸部族を，近年の研究動向を参考に取り込むことを試みている。筆者の検討に拠れば，ライン沿岸地域では，帝位簒奪や僭称事件のあった一時期を除けば帝国の支配はおおむね安定していたとみてよい。また，ユリアヌスの軍事行動は，ローマ皇帝の伝統的な辺境政策からはみ出した強圧的な要素があったものの，ライン辺境地域の住民を必要に応じて取り込む融通無碍なローマの従来からの辺境政策の範囲内で理解することができる。筆者は，ローマがライン・ドナウの辺境地域の人々を「他者」「敵」と認識するのは，アドリアノープルの戦いでの敗戦以降の激動の中と考えている。

はじめに

コンスタンティヌス大帝の甥に当たるユリアヌスは，コンスタンティウス2世帝の急死を受けて，361年11月にローマ帝国を統べる唯一の皇帝となったが，363年6月には遠征先の東方，ティグリス河畔のペルシア戦線で戦死した。その治世はわずか1年半あまりに過ぎない。この短い治世の間にユリアヌスは，後世「背教者」とのレッテルを貼られることになるような，いわゆる「異教」の復興をめざした。そのために，治世の短さにもかかわらず，ユリアヌスは人々の注目を集め，数多くの研究もなされてきた。ただ，研究の多くが彼の宗教政策そのものや理念，異教復興に至る彼の思想・精神の遍歴などの解明に当てられており，ユリアヌスを皇帝として，大帝国の統治者，政治家・軍指揮者として検討した研究は少ない[1)]。

幾度も小説に取り上げられたように，ユリアヌスはきわめて不幸な幼少年期を送った。331

年[2]に彼は生まれたが，生後まもなく母バシリナを亡くし，さらに337年のコンスタンティヌス大帝死の直後にコンスタンティノープルで生じた軍隊の暴動により，父親（大帝の異母弟）や兄を殺害され，異母兄のガルスとただ二人，生き延びた。その後，皇帝コンスタンティウス2世に監視される生活の中で成長した彼は，政治・軍事から切り離されて，哲学・文学に親しむ青年となった。しかし，その彼が，355年11月，皇帝によってカエサル（副帝，以下副帝と表記）に任じられ，ガリアに派遣されると，統治者・軍指揮者として顕著な働きをし，360年，ついに麾下の軍隊によって皇帝に宣言され，コンスタンティウス2世と対立するに至る。こうした登位に至るまでの彼の歩みも，これまでの研究においては，まずは即位後の異教復活への前提をなすものと理解され，それと関連づけられて分析されることが多かった。わが国には，辻邦生氏の小説『背教者ユリアヌス』という記念碑的作品があるのは特記されるべきであろうが，研究としては後述する秀村欣二氏，および長友栄三郎氏の先駆的業績と中西恭子氏のユリアヌスの思想・信仰をめぐる宗教学的研究が専論として参照できるものの，ユリアヌスの政治については，本誌6号掲載のユリアヌスの皇帝としての意識を論じた南雲泰輔氏の論文が貴重な研究成果である[3]。

しかし，幼少年期はともかく，副帝に任じられガリア統治に赴いて以降のユリアヌスの活動は，ローマ帝国領の外の部族の動向や，それと連動する帝国領西半部の政治的軍事的状況と密接に関係している。とりわけ，彼がガリアで麾下の軍によって皇帝に宣せられたのは，ローマに敵対するフランク族やアラマンニ族と戦って軍事的な名声を得たことが前提と理解されている。ユリアヌスがガリアにやって来た当時，ガリアは帝国の外から侵入した部族のために荒廃していた。そうした敵対勢力をユリアヌスが駆逐し，さらに国境線となっていたライン川を越えて侵攻して，帝国の威光を取り戻し，軍の支持を得たと説明されてきたのである。

先にも触れたように，ユリアヌス帝についてわが国の学界で先駆的に，かつ欧米学界の研究成果を踏まえて本格的に論じたのは，秀村欣二教授であったが，同教授は，1953年にユリアヌスの生涯全体を扱った論文の中で，ユリアヌス登位に至る経過について，以下のように述べている。少し長くなるが，その後の学説の変化と問題点をわかりやすくするために，重要箇所を引用しておきたい。

「彼は副帝即位後3週間，12月1日，ミラノを出発，・・・(中略)・・・彼の護衛は僅か360人，ユリアヌスの言葉を借りると凡て祈ることしか知らぬキリスト教徒であった。こうしてユリウス＝カエサルならぬ戦いに習らわぬ若きカエサルは錯雑した想いを胸に秘めて戦雲たなびくガリアへと赴いたのである。

ユリアヌスがタウリン（ママ）（トリノ）まで来てみると，宮廷ではすでに知られていたが，彼には出発の妨げになることを慮ってかくされていた恐るべき事実が判明した。下ゲルマニアの首都ケルンがゲルマン人の執拗な包囲をうけた後，陥落，掠奪されたことである。・・・(中略)・・・ガリアはもはやローマ帝政初期の平和と繁栄を失いかけていた。ゲルマン人が多

くの地方に侵入し，都市を破壊し，田園を荒廃させた。ケルト人はもはや家畜を放牧させておくことはできなくなった。侵略を免れた都市人口は減少した。民衆の貧困と大土地所有者の発展が見られた。

数奇な運命が遂に彼を戦場に駆り立てたが，従来学問研究に身を委ねた白面の一貴公子がこの困難な任務に堪え得るかは甚だ危ぶまれたことであった。ところがこの学芸の女神ミネルヴァの帰依者は驚くべき迅速さを以て，これまで内に秘められていた軍神マルスむしろ太陽神ヘリオス・ミトラより賦けた能力をも発揮して，ガリアに征戦5箇年の間にガリアの平和と繁栄を回復し，ゲルマン人の俘虜となっていたローマ軍2万を奪還し，ゲルマン人をライン右岸に撃退し，4度ラインを渡河した。」[4)]

この後，秀村教授は，ユリアヌスが「アレマンニ人」をストラスブールの戦いで破って軍隊の信望を勝ち得たこと，この間次第に政治上の実権も掌握して，為政者としても充分な治績をあげたこと，そしてまもなく皇帝コンスタンティウス2世から，ガリアにあるローマ軍に現地民の補助軍をも加えて総兵力の半数以上を東方に転進させるように命令が来たが，ユリアヌス自身はその命に逆らわなかったものの，部下の軍隊，とくに郷土の防衛を放棄して遠い異郷に出征することを拒んだ補助軍の間に不穏の空気が漲り始め，遂に360年2月にパリで軍隊はユリアヌスを皇帝と宣言し，ユリアヌスもこれを受けてコンスタンティウス2世と対決するに至ったこと，以上を説明している[5)]。

こうしたユリアヌスのガリア統治は，彼が全帝国を統治する皇帝となるに至る経緯として重視され，また数奇な運命にもてあそばれる哲学青年の格闘として，いやがおうにもロマンをかき立てるものであった。ところが，1978年にユリアヌスに関するきわめて示唆と刺激に富む著書を公刊したG・W・バワーソックは，ガリア統治時のユリアヌスをきわめて現実主義的で冷酷な人物と解釈し，征服活動の信奉者であるとするとともに，パリでの皇帝宣言も彼の計画的行動と結論づけた[6)]。バワーソックは，従来の悲劇の主人公というユリアヌスとは異なる人物像を提出したのであり，その後のユリアヌス解釈に影響を与えることとなった。1998年刊行の『ケンブリッジ古代史』第2版におけるD・ハントの叙述[7)]にもそれを見ることができる。

さらに，ユリアヌスに同情的な解釈に対する疑念は，別のところからも現れた。ユリアヌスが統治に臨んだ当時のガリアは荒廃し，悲惨な状況にあったと長らく理解されていた。前述のバワーソックの書物が公刊された3年後，1981年に重要な研究書を刊行したP・アタナシアディ＝ファウデンも，この点について次のように書いている。「ガリアは，かつては豊かな属州であったが，355年には荒廃していた。ライン川に沿った45の町々はアラマンニ族によって占領されており，・・・・(中略)・・・若き副帝がガリアに到着して実際に見たものは，めちゃくちゃになった土地だったのである。」[8)] こうしたユリアヌスの赴任時のガリア理解は，先に引用した秀村教授の文章にも見える。かかる理解は，基本史料となってきたアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』の叙述が折々に与える印象や500年頃に書かれたゾ

シモスの史書[8]に基づくと思われ，2007年刊行のS・ミッチェルの後期ローマ帝国史の概説書[10]にも引き続き採用されている。

ところが，近年の考古学研究の進展を踏まえたJ・ドリンクウォーターの研究[11]にあっては，ユリアヌス赴任の頃のガリアには外部からの脅威は大きくなかったと述べている。先に秀村教授が言及したケルンの陥落も，その後ローマ側に容易に回復された点を強調して，その脅威が深刻でなかったことを主張している。さらに，21世紀になって発表された古代終焉期を扱う書物の中には，4世紀のローマ帝国の国力が従来の研究の想定よりもはるかに強力であり，帝国の外からの力が真の脅威となったのは，フン族の圧力が直接影響してきてからであると説く者もある[12]。こうした研究動向に照らすならば，ユリアヌスの赴任時のガリアの状況が，P・アタナシアディ＝ファウデンが述べたようなものではなかったのではないかという疑いが出てくるのである。

以上のような問題の把握のもと，本稿では，登位の背景となったユリアヌスのガリアでの行動を再考することを試みる。本論では，これまでの史実の解釈について，基本史料となってきたアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』などを今日の視座から点検することで再考するとともに，属州内外の諸部族の動きを政治史に取り込むための，ささやかな提言を述べてみたい。なお，筆者はユリアヌス個人の生涯や思想・信条について大いに関心を持っているが，この小論のねらいはユリアヌスや皇帝コンスタンティウス2世ら個人の意図や行動の解釈，歴史的評価を考えることではない。あくまでも4世紀中葉のローマ帝国の実態を正確に捉えるための素材を得るべく，ユリアヌスのガリアでの行動を検討しようとするものである。

第1章　副帝ユリアヌス赴任前のライン沿岸地域

私たちはまず，ユリアヌス赴任当時のライン沿岸地方の政治・軍事状況について，できる限り関連する事項を明らかにする作業から始めよう。

副帝の称号を帯びたユリアヌスが355年の12月にガリアに赴任したとき，ライン川沿いの地域は，おおむね以下のような行政的軍事的制度のもとにあったといってよかろう。すなわち，ライン川の西岸地域には，元首政時代は上部ゲルマニアと下部ゲルマニアの2つの属州が設置され，しかもライン川を越えて東に大きくせり出す形で防衛線，リメースが築かれていた。現在のドイツのコブレンツの北西からレーゲンスブルクの南西あたりまで，全長580キロメートルにも及ぶこの防衛線は，一定間隔で砦や見張り塔が設けられていたものの，おおむね土と木で造られた防壁に過ぎなかった。この防衛線が，260年代に外部からの攻撃で破壊されて，3世紀の後半には，ライン川上流とドナウ川の上流に挟まれた三角形の地域，「アグリ・デクマテス」と呼ばれてきた地域に，アラマンニ族が移動して定着するようになり，「アラマンニア」といわれる領域が形成されるようになる。さらに，ライン川の下流地方にもフランク族が東から侵攻して，帝国領を脅かす存在になった

リメースの崩壊，アグリ・デクマテスの放棄の後，混乱したライン川周辺地域を，ディオクレティアヌス帝は同僚皇帝マクシミアヌスとその副帝のコンスタンティウス1世（大帝の父親）を使って回復させた[13]。そして，この地域の行政単位は，ディオクレティアヌスとコンスタンティヌス大帝の時代に再編された。かつての上部ゲルマニアと下部ゲルマニアの2属州の設置されていた地域は，他の属州とともにガリア管区に編入され，ガリア管区は8の属州に細分化された。ライン川周辺は，北のかつての下部ゲルマニア属州に相当する地域がゲルマニア・セクンダ属州となり，ライン川河口部やトクサンドリアまでその領域に含んだ。中心都市はコロニア・アグリッピネンシス，すなわち今日のケルンである。かつての上部ゲルマニア属州は2分されて，ライン川中流域は，モゴンティアクム，すなわち現在のドイツのマインツを州の中心地とするゲルマニア・プリマとなり，南部はウェソンティオ，現フランスのブザンソンを中心地とするセクアニア（のちにマクシマ・セクアノルム）属州となった。管区全体の中心はアウグスタ・トレウェロルム，すなわち現在のドイツのトリーアにあり，コンスタンティヌス1世（後の大帝）が帝国西部の統治をしていた時期，この都市が宮廷の所在地として栄えたことはよく知られている。

337年のコンスタンティヌス大帝の死後，その遺領は3男子に分割相続され，ガリア，ブリテン島，スペインなどの帝国西部はコンスタンティヌス2世の，帝国中央部はコンスタンスの統治するところとなったが，340年に両者が争って，帝国西半はすべて勝者コンスタンスの支配下に入った。コンスタンスはライン沿岸地域でアラマンニ族に対して強い力を保ち，フランク族にも2度遠征している[14]。343年にはブリテン島にも渡った。ライン沿岸地域はコンスタンスの統治下でローマ帝国領として安定していたとみてよい。

しかし，兄を打倒して支配領を拡大したコンスタンスは，350年1月，ガリアのオータンで，機動軍の隊長であったマグヌス・マグネンティウスのクーデタによって殺害されてしまった。コンスタンスは皇帝として不人気であったことが史料から窺える[15]が，コンスタンティヌス大帝の後継者の3男子のうちで生き残ったのは，今や帝国東半を統べるコンスタンティウス2世のみとなったのである。

マグネンティウスは，ガリアの1都市（現アミアン）の生まれで，あるスコリアに，彼の父はブリテン島の出身者，母はフランク族の人と記録されている[16]。より正確には，彼は帝国内へ移住し，軍勤務と引き替えに定住を許された「ゲルマン系」の人々の集団，ラエティの出であり，この点が大事である[17]。ただし，これをもって「蛮族」が皇帝位を簒奪したと意義付けるのは，今日の歴史認識に照らして適切な理解の仕方ではない。彼はプロテクトルなどローマの軍人経歴を歩んで，高位の指揮官となったのであって，4世紀の前半以降に増えてきた「新しいローマ人」というのが適当であろう。これについては第4章で再度触れることになる。

コンスタンティウス2世は，340年の兄弟間の争いは静観し，その後も，アリウス派を支持した彼は正統派支持のコンスタンスと折り合いが良くなかったが，そのコンスタンスが殺

害されたという報に接し，対ササン朝ペルシア作戦を切り上げて，簒奪帝マグネンティウスに対抗せざるをえなくなった。

350年3月になると，ドナウ中流域で，コンスタンスの歩兵長官であったウェトラニオが皇帝に宣言されるという事件が起こった。ウェトラニオはドナウ沿岸属州下部モエシアの下層の生まれで，軍事経歴を歩んできた人物である。ウェトラニオが12月までこの地域を支配したことは，マグネンティウスの軍隊の東への進軍を阻み，コンスタンティウス2世の軍が東方属州から移動するための時間を確保した。12月にウェトラニオとコンスタンティウス2世の両者はトラキアのセルディカ（現ソフィア）で会見し，ウェトラニオは廃位され，ビテュニアのプルサに追放となった（356年に私人として死亡している）。ウェトラニオの簒奪事件はこうして幕を閉じたが，史料上彼はまったく簒奪者との印象を与えていない。マグネンティウス東方進軍阻止のために擁立されたかのように見え，きわめて奇妙な事件である。そのため，ウェトラニオ簒奪事件はコンスタンティウス2世側の策略との見方がなされてきた[18]。

12月の終わりには，上モエシアのナイッスス（現ニッシュ）でウェトラニオの軍が皇帝の指揮下へ統合され，西に向かった。そして，翌351年9月28日に，マグネンティウスと皇帝コンスタンティウス2世の軍隊は，下パンノニアのムルサ（現 Osijek）で激突した。マグネンティウスは軍の3分の2を失って敗れ，勝ったコンスタンティウス2世も自軍の半数近くを失った。ローマ帝国軍としては莫大な兵力の損失となった。マグネンティウスは西に逃れて，353年に8月，ガリアのルグドゥヌムで自殺した。

こうして，コンスタンティウス2世は帝国を統べる唯一のローマ皇帝となったが，この内戦の間に帝国西半では，軍隊が手薄になった地域へアラマンニ族やフランク族が侵攻してきた。そして，ローマ人居住地への攻撃がなされている。現在のオランダに近いドイツ西北部のライン川沿いに造られていたローマ人の植民市，カストラ・ウェテラ（コロニア・ウルピアナ・トラヤナ，現在のクサンテン）は351年，ないし352年に破壊された[19]。

しかし，コンスタンティウス2世の対応は早かった。皇帝は，マグネンティウスの支配下に入っていた地域の統制のために次々と手を打つ。例えば，マインツ駐屯の第22軍団はムルサの戦いで壊滅し，その陣営は廃棄されたが，代わって町には milites armigeri が駐屯するようになる[20]。シルウァヌスにガリアにおける軍隊指揮の大きな権限を与えて，アラマンニ族，フランク族に対応させ，またブリテン島には，簒奪者に味方した者を処罰するためにかの有名な「鎖のパウルス」を派遣したりした[21]。皇帝は，353年に南フランスのアルルで，副帝就任以来30年の記念を祝ったが，翌年春にはアラマンニ族に対抗するためにアルルから北東に移動し，アラマンニ族の王たちと和を結んだ[22]。そしてイタリアに移り，ミラノに宮廷を置いた。

以上のように，コンスタンス死後の一時的な混乱はあったものの，コンスタンティヌス大帝時代からのライン沿岸地域のローマ支配はおおむね安定しており，コンスタンティウス

2世によるライン沿岸地域でのローマ帝国の威信回復策も順調に進んでいたと解釈できる。一方で，皇帝不在の帝国東部国境地方が騒がしくなってきた。コンスタンティウス2世は，351年にガルス（ユリアヌスの異母兄）を副帝に任じて，自身の代理として東方統治に派遣していたが，そのガルスと皇帝の部下との対立が昂じて，遂にコンスタンティウス2世はガルスをイタリアに召還し，354年10月には逮捕，廃位して処刑するに至った。このため，皇帝は東方に帰還を考えねばならなくなったのである。

ところが，ガルスを処刑した翌年，355年の8月に，ライン沿岸の重要拠点の一つ，ケルンで，ガリアでの大きな軍指揮権を与えられていたシルウァヌスが軍隊に皇帝と宣言され，反旗を翻した。シルウァヌスの父であるボニトゥスは，コンスタンティヌス1世（大帝）が324年，単独帝位をかけてリキニウスと戦った際に活躍したフランク族出身のローマ軍の将軍であった。母親も「蛮族」の出と史料は記す[23]。

シルウァヌスの反乱は，28日後に彼が軍隊によって殺害されることで終結して，帝国西半に広く波及することはなく，それまでのライン沿岸属州の防衛に関しても何ら問題はなかったが，それでもコンスタンティウス2世は東方に向かうにあたって，帝国領の内外の安定のために，皇帝の支配権を何らかの形でガリアに残しておく必要を感じたであろう。これこそかのテトラルキア（四分統治）の教訓であった。しかし，ガルスを処刑したコンスタンティウス2世にとって，残る皇帝家の親族男子は一人しかいなかった。ユリアヌスである。

第2章　副帝ユリアヌスのガリア統治

ユリアヌスが副帝としてガリアに赴任した355年12月頃までのライン沿岸地域の状況は，おおよそ以上の通りであった。次はユリアヌスの行動の検証作業である。

ガリアでのユリアヌスの行動については，アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』が主要史料である。その卓抜な筆致だけでなく，著者アンミアヌス自身がユリアヌスの行動を観察できる距離で軍人として勤務していた点で，この史料はすこぶる重要である。もっとも，その記述はユリアヌスを高く評価し，英雄視していることが特徴である[24]。他に，ユリアヌスが，ガリアの軍隊によって皇帝と宣言されコンスタンティウス2世と対立することになった時期，361年頃に記した『アテナイの人々への手紙』にも，自身のガリア統治から皇帝推戴までの説明がある[25]。これはユリアヌス自らが記したものであるため，自身に不利な内容にはならないように書いたであろうことは間違いない。しかし，ユリアヌス自身の記述が，評価の高いアンミアヌスの史書と一致する点が多かったために，長らくユリアヌスとその時代の解釈の基調がユリアヌスに同情的なものとなっていたといってよかろう。

さて，何の政治・軍事経験もないユリアヌスがガリアに到着したとき，コンスタンティウス2世の将軍であるウルシキヌスが，シルウァヌスの反乱の鎮圧後も，オリエンス道の騎兵長官の肩書きのままとどまっていた。このウルシキヌスは，史家アンミアヌス・マルケリヌ

スの上官である。356年春にその後任としてマルケルスが来てからも，ウルシキヌスはガリアにとどまっていた。ユリアヌスは南部から少数の兵を率いて，機動部隊を率いる2人の将軍にランスで合流するよう指示された。リヨンの南，ヴィエンヌの町から北上したユリアヌスは，当時のこの地の状況を，後に書いた『アテナイの人々への手紙』の中で以下のように述べている。

「コンスタンティウスは私に，360名の兵を与えて，冬の半ばにケルト人たちの土地（ガリア）へと出立させた。その地はその頃，ひどく乱れた状態にあった。そして，私は軍の指揮官として派遣されたのではなく，ガリアに駐屯する将軍たちの部下として送られたのである。というのも，彼らには書簡が送られており，敵と同じくらい私を見張るように命じられていた。私が反乱を起こしたりするのではないかと恐れていたからである。」[26]　アンミアヌス・マルケリヌスも，ユリアヌスの副帝任命前，皇帝コンスタンティウス2世はガリアがひどい状態にあるとの報告をしばしば受けていたと記している[27]。

これらの史料によれば，当時のガリアが「蛮族」のためにひどく荒廃しているとともに，そこに派遣されたユリアヌスは，満足な兵も与えられず，皇帝の部下に監視されているような状況で，実際のガリアにおける統治権や軍指揮権はなかったようである。さらに，皇帝コンスタンティウス2世のユリアヌスに対する悪意を明示するのは，エウナピオス『哲学者およびソフィスト列伝』[28]の「マクシモス」の項である。エウナピオスは4世紀の中頃，小アジアのサルディスに生まれ，哲学者クリュサンティオスの教えを受けたが，このクリュサンティオスにユリアヌスが心酔していた。エウナピオスはこの師に勧められて『列伝』を書いたようであるが，ユリアヌスの師に当たるマクシモスを『列伝』で取り上げながら，その記述の中心にはユリアヌスを置いている[29]。関係部分を以下に引用しよう。

「ユリアヌスは副帝として※ガラティアに派遣された。これは，かの地の人々を統治することだけが目的なのではなく，ユリアヌスが皇帝の職務を果たしている間に非業の最期を遂げる，というのが狙いだった。だが，すべての予想を覆して，彼は神々の摂理により生還を果たした。つまり，彼は，自分が神々に献身的に仕えていることは誰にも隠していたが，しかし，献身的な奉仕をしていたからこそ，誰にも打ち勝ったのである。」（戸塚七郎訳，※「ガラティア」はここでは「ガリア」を指す）[30]

こうした史料の記述を念頭にユリアヌスの活動を眺めると，まず問題になるのは，ユリアヌスによるケルン回復である。すでに引用した秀村教授の文章に見えるように，ユリアヌスのガリア赴任時に，ライン河畔の重要都市ケルンが「蛮族」（おそらくフランク族の一部）に占領された。この事件は，アンミアヌスがその史書の第15巻において「ゲルマニア・セクンダの有名な町，コロニア・アグリッピナ（ケルン）が，蛮族の大軍によって攻撃され，長い攻囲の後に攻略され，破壊されたとの知らせが届いた」[31]と明言している。さらに，アンミアヌスは第16巻の第3章において，ユリアヌスがケルンの町を回復して，フランク族の王たちと講和条約を結んだとも記している。

一方，ユリアヌス自身は『アテナイの人々への手紙』の中で，皇帝が357年の春から機動軍の指揮を委ねてくれるようになったとしていて[32]，その後に，ケルンの町を陥落の10ヶ月後に回復したという記述を置いている[33]。このため，これまでの研究や叙述では，ケルンの陥落とローマ側への回復の年代を357年とすることが多かったが，ユリアヌスの作為を重視するバワーソックは，この事件が356年9月より後に起こったとは考えられないと主張する[34]。ケルン陥落がアンミアヌスの記録から355年の事件であって，ユリアヌスのいうように10ヶ月で回復したのであれば，回復は356年のことである。D・ハントらもバワーソックの説に従っている[35]。ケルンの陥落と回復の年代が問題になるのは，ユリアヌスのガリア統治の年代の決定に重要であるだけでなく，356年に回復されたとすればユリアヌスの主導下でなされた作戦ではなく，コンスタンティウス2世の作戦の下でなされたものであったことになり，かつ比較的容易に回復されたと想定することもできるからである。2004年にケルン市の歴史に関する大著を著したW・エックが，考古学情報も取り込みつつケルンの陥落を355年11月と説得的に論じているので[36]，私もこの見方に従い，回復は356年のうちになされたと考えたい。

さて，ユリアヌスがコンスタンティウス2世とともにコンスルになった356年，ユリアヌスは冬営していたヴィエンヌから北へ進んで，ブルゴーニュ地方のオータンが「蛮族」に攻撃されていたのを撃退し，さらにオーセール，そしてトロワと進んで，ランスに着いた。そして，ランスで長官マルケルスらの軍と合流した。

356年になされた一連の軍事作戦では，主導者はコンスタンティウス2世の2人の将軍であった。先に見たように，ユリアヌスは当初ごく少数の兵隊しか保持していなかったことを強調しているが，副帝位にはあったものの，軍事経験がない彼に当初から大軍の実質指揮ができるわけもなく，コンスタンティウス2世の将軍が取り仕切ったのは当然といってよい。

ところで，ユリアヌスは356年から357年にかけての冬に，オーセールの北のサンスの町で，アラマンニ族の軍に攻囲され，孤立無援の状態に陥った[37]。30日間攻囲されたが，ユリアヌスは何とか自力で攻囲を乗り切った。この事態にあたって，ガリア軍の指揮者である騎兵長官マルケルスは，副帝を救助しなかった。その理由は様々に解釈されてきたが，とくにマルケルスが救援に来なかったのは皇帝のユリアヌスに対する悪意に発するものと解されることがあった。しかし，コンスタンティウス2世はその後マルケルスを更迭し，代わりに経験豊かな将軍セウェルスを着任させている。この時点では，コンスタンティウス2世はユリアヌスの活動を支援しようとしていると解釈してよいのであり，皇帝のユリアヌスに対する悪意をわざわざ早くから想定する必要はないだろう。

史家アンミアヌス・マルケリヌスは，マルケルスが召還された際に自分を皇帝に中傷せぬよう，ユリアヌスはエウテリウスという帝室役人の長（praepositus cubiculi）をミラノに送ったと述べている[38]。こうした記事と，後にコンスタンティウス2世と対立するようになったユリアヌス自身が書いた書簡，さらには上に見たエウナピオスの言及などを組み合わ

せて，ガリア赴任当初からのコンスタンティウス2世のユリアヌスに対する疑いと悪意を想定することがなされてきたが，そうした解釈は親ユリアヌス史料の筋書きにはまりこんだものといってよかろう。

ユリアヌスは356年のうちに，ライン川沿いの町や要塞，ブルコマグス（現ブルマト），ノウィオマグス（現シュパイヤー），ボルベトマグス（現ウォルムス）などを確保する作戦に関わったとみられる[39]。軍事行動では，主導的立場にはなかったものの，フランク族とアラマンニ族という2つの敵対勢力との戦闘を経験して，ライン川を越えて勢力を拡大している敵を駆逐することを責務と考えるようになった，と想定できる。そして，北イタリアに陣取って指揮をしたコンスタンティウス2世の下でなされたこれらの「敵」に対する対応は，まずまず成功していたのであり，ガリアとライン沿岸地域はおおむね安定していたといってよいのではなかろうか。

第3章　ユリアヌスと「ゲルマン人」

357年という年は，副帝のユリアヌスにとって，きわめて大きな意義のある年となった。この年ユリアヌスは，コンスタンティウス2世の将軍で歩兵長官のバルバティオが率いる軍勢と，ライン・ドナウ両川上流域にいる敵対的なアラマンニ族を挟撃することになった。しかし，作戦は成功せず，バルバティオの軍は途中で撤退し，ユリアヌスは単独でアラマンニ族の大軍と正面から戦わねばならなくなった。これが，有名なストラスブールの戦いである。

先にも紹介したが，『アテナイの人々への手紙』の中で，ユリアヌスは，皇帝が357年の春から機動軍の指揮を委ねてくれるようになったとしている[40]。事実，この年あたりから，皇帝コンスタンティウス2世は帝国の東方，ペルシアの王シャープールに対する対応に悩まされることが増えていく。疑い深い人物と評される皇帝も，帝国西部についてはユリアヌスや将軍たちにある程度委ねねばならなくなったと想定される。そのユリアヌスのもとにはセウェルスが騎兵長官として軍の指揮をしており，その豊かな軍事経験から若き副帝は多くを学んでいたと思われる。

ストラスブールの戦いの叙述は，アンミアヌス・マルケリヌスの史書の中で，378年のアドリアノープルの戦いと並ぶ，力のこもった書かれ方が印象深い箇所であるが，後者がローマ側の大敗北に終わったのに対して，前者は数において勝る敵にローマ側が勝利を収めたために，その叙述（第16巻12）も全部で70節と長い。しかし，戦闘の状況などは本稿の議論に関係ないので，ごく簡単に経緯のみ記しておこう。

アラマンニ族のクノドマリウスとウェストラルプス，ウリウス，ウルシキヌスらの王たちが，セラピオ，スオマリウス，ホルタリウスとともにガリアを圧迫していたので，ローマはこの脅威を除くべく，兵力2万5千のバルバティオの軍がアウグスタ・ラウリカ（現在のス

イスのバーゼルに近いアウクスト）から出発して，ガリア中部から東に向かったユリアヌスの軍1万3千とともに，敵を挟み撃ちにする計画であった。しかし，バルバティオの軍は途中で攻撃を受けて退却し[41]，ユリアヌス軍1万3千だけが3万5千のアラマンニ族軍と対決することになった。

この戦いについて，ユリアヌス自身の手になる記録があったようである[42]が，失われた。ユリアヌスを英雄扱いするアンミアヌスの叙述によれば，戦闘はローマ側の大勝利で終わり，アラマンニ族はライン川へと押し戻され，6千名もの死者を出したという。一方，ローマ側の戦死者は兵士243名と将校4名であった[43]。

勝利を収めた兵士たちが，一致してユリアヌスを「アウグストゥス」と歓呼したとアンミアヌスは伝える。しかし，ユリアヌスはこれにとりあわず，兵士の考え無しの行動を叱ったとも記している[44]。ユリアヌスは，捕らえたクノドマリウスを皇帝コンスタンティウス2世の宮廷に送り，皇帝の戦勝の祝いに供した。この行動は，「アウグストゥス」歓呼が耳に入ってユリアヌスに疑念を抱いたかもしれないコンスタンティウス2世を宥めるのに効果があったであろう，とD・ハントは指摘している[45]。

この戦いの後，ユリアヌスはさらに敵対する部族に攻勢をかける。ライン川中流域のモゴンティアクム（今日のマインツ）からライン川を渡ってアラマンニ族の住地に入り，村々を荒らした。次いで北進し，まずセウェルスをケルンに派遣してフランク族に対処させ，自らも赴いて，敵をマアス川（ムーズ川）沿いの2つの要塞へと押し返した。そして，54日間攻囲して降伏させ，帝国軍の援助になるようにフランク族の者たちを皇帝の元へ送った。こうした作戦は，ユリアヌスが以後3年間根拠地とするパリに入るまで，その年ずっと継続したようである[46]。

フランク族のうち，357年から358年にかけてユリアヌスの敵となった部族としてアンミアヌスが言及しているのは，サリイ族とカマウィ族である[47]。中でも，ユリアヌスはこのサリイ族を「トクサンドリア付近のローマ人の土地」に定住させることにした，とアンミアヌスは記している[48]。トクサンドリア（元来はテクスアンドリアか）は，マアス川とスヘルデ川との間にある地域であるが，この措置は決して先例のないことではなかった。すでに3世紀の終わりに，マクシミアヌス帝やコンスタンティウス1世（大帝の父親）がフランク族をライン川とスヘルデ川の間の地に定住させたことがあった[49]。しかし，ユリアヌスの時代，このトクサンドリアの地にはすでにローマの守備隊はいなかった。にもかかわらず，ローマ人史家アンミアヌスはこの地を「ローマ人の土地」と認識していたのである[50]。半世紀のちになると，サリイ族はこの地から領土を拡大してゆくこととなる。

ユリアヌスは，イーセル川とライン川の間に居住していたカマウィ族に対しては，ガリア道長官のフロレンティウスが高い税を課そうとするのに反対して，軍事行動を選んだ。カマウィ族はブリテン島からライン川へと穀物が送られてくる水路をおさえていたので，ユリアヌスは彼らを服従させて，マアス河畔に要塞を築いた。これによって，ブリテン島から穀物

を載せてやって来る船は，600 隻に増えた[51]。

358 年以降も，ユリアヌスは統治下のガリアにおいて，行政上の措置をおこなうとともに，ライン沿岸で軍事行動を継続している。ユリアヌスは「国境」の外や周辺部の諸部族と，従来の皇帝たちがなしたような有機的な関係を取り結ぶことをせず，もっぱら軍事行動で威圧することを選んだように見える。すでに，ストラスブールの戦い前にその方向をはっきり見せていた。ユリアヌスは軍にアルザス地方のアラマンニ族の耕作地を収奪することを許したが，この地域での耕作はコンスタンティウス 2 世がアラマンニ族に認めていたことであるとアラマンニ側から抗議の使節がユリアヌスの許を訪れた。その使者をユリアヌスはスパイとして捕らえたのである[52]。ユリアヌス自身『アテナイの人々への手紙』の中で，コンスタンティウス 2 世を「蛮族」に対して柔弱で，戦うことよりも交渉してラインの通行のために金を払う方を好むと批判的に記している[53]。359 年には，ボンナ（現ボン）などの 7 つの都市（civitas）を回復して，市壁を修理した[54]。360 年になると，Germanicus Maximus や Sarmaticus Maximus だけでなく Alamannicus Maximus や Francicus Maximus という栄誉称号をも手にしている[55]。

ところで，かかるユリアヌスと戦った当時のアラマンニ族とフランク族は，どのような集団だったのだろうか。一般に「ゲルマン人」「ゲルマン民族」と一括りにされるローマ帝国国境の内外に居住する人々については，古くから数多くの研究が積み重ねられてきた。ルネサンス期にタキトゥスの作品が再発見されて以来，まず古典文献学の立場から検討され，次いで言語学，さらには考古学の方法による研究がなされた。研究にはその時代の性格が反映され，19 世紀後半からはそれ以前にも増して強くナショナリズムの影響を受けるようになった。そして，優れた実証研究もなされてはいたが，ナチズムの時代まで，政治イデオロギーに左右されることが多かったのである。第 2 次世界大戦後には，そうした過去の研究史の難点を克服しようとする性格の研究がなされることになる[56]。

第 2 次世界大戦後の「ゲルマン人」研究において大きな画期をなしたのは，1961 年刊行のラインハルト・ヴェンスクスの『部族形成と国制――中世初期の部族の生成――』[57] である。彼は，「蛮族」の移動が全住民の動きではなく，伝統の核（Traditionskern）の守り手の移動であって，軍事的勝利などを通じて人々を集めたとみた。「民族」集団が固定的なものでなく，移動期はエスニックな集団が生成される過程にあるというその見方（のちに，他分野から借用した用語を用いて ethnogenesis と呼ばれる）は，オーストリアのヘルヴィッヒ・ヴォルフラムに継承発展された。さらにヴァルター・ポールに受け継がれ，英語圏の研究者によってさらに新たな展開をなした[58]。1990 年代，ヨーロッパ連合の統合進展を背景に古代の終焉期から中世初期にかけての研究は一層進み，ヨーロッパ科学財団の「ローマ世界の変容」プロジェクトが膨大な成果を上げている[59]。ここではそうした研究動向の詳細を紹介することはしないが，現時点での考証の基準を本稿にかかわる点についてのみ簡単に述べれば，次のようになろう。

古代の終焉期に大移動をおこなった「ゲルマン人」は，スカンディナヴィアなど北の故地を離れて長い移動の末，ローマ帝国領に入って帝国を滅ぼし，王国を建設したとかつては考えられていた。そこでは，移動した「民族」は種族的な繋がりを保持していたと想定されていた。しかし，現在では，「ゲルマン系」の民族集団（ethnic group）は固定的で完成された集団とは考えられていない。後期ローマ帝国時代に登場する「ゲルマン系」の諸部族はたいへん流動性の高い集団であると認識されている。その歴史のはじめからの種族的な繋がりを保った，固定的で完成された集団とは考えず，その時々の政治的利害によって離合集散を繰り返して，その構成員やいわゆるアイデンティティが形成されていったと理解されているのである。いわば「エトノス」の形成期にある可変的集団というわけである。

そうした見方による典型的な解釈の変化は，ゴート族の歴史の理解にみられる。長らくゴート族は，スカンディナヴィアからまずは黒海付近に移住したとみられていた。そして，フン族が西進を開始すると，グレウトゥンギと呼ばれるゴート族の一派はその支配に下ったが，その西方に居住した一派，テルウィンギ集団が西へ逃れて，ローマ帝国の保護を求めてドナウ川を渡り，民族大移動の時代の幕を開けたとされてきた。その際，テルウィンギが西ゴート族に，グレウトゥンギが東ゴート族に相当すると理解されている。

しかし，現在では，ゴート族の現住地とみるべきはポーランドのポメラニア地方で，しかもドナウを渡った西ゴート族とされてきた集団も，テルウィンギを中心にグレウトゥンギの一部やゴート族以外の人々も加わったものであって，「西ゴート族」「東ゴート族」といわれる集団は，のちにフン族やローマ国家とのさらなる関わりを通じ離合集散を繰り返しながら形成されたものとみられるようになっている[60]。

ユリアヌスが戦ったフランク族とアラマンニ族についても，このような観点から理解することが必要である。フランク族，あるいはアラマンニ族という固定的な「民族」集団がローマ帝国と対決したというような見方は今日的ではない。アラマンニ族もフランク族も，名称はゲルマン系の言語に由来するので，ローマの著述者はその集団のメンバーやその周辺のものからそれを知ったに違いない。しかし，彼らは遠方のどこからか移住してきた集団というわけではなく，土着の多数の部族から構成された雑多な集団であり，4世紀後半までの段階では，大きな括りでの集団の固有のエスニシティやアイデンティティを保有するものではなかった[61]。アンミアヌスのような優れた史家も含めて，ローマ側の著述者は，彼らに共通する点を見いだして，一定のレッテルを貼ったような記述をしているが，それは正確な集団の区分を可能にするような規範ではない。アイデンティティの可変性を念頭に置けば，たとえ考古資料による「文化」の分類に基づくとしても，大きな括りの集団を想定することには慎重でなければならない。

フランク族は，現在のドイツ，ヴェーザー川とライン川の間の地方に居住した小さな部族集団が集まって形成されたと考えられる。カマウィ，カットゥアリ，ブルクテリ，アムスウァリ，シカンブリなどの小部族集団が，元の構成部族の名称として知られている。しか

も，形成された集団もいくつかの小集団に分かれていた。すでにみたトクサンドリアに居住するようになったサリイ・フランク，そしてのちにローマとの境界となっているライン川の中下流域に居住するようになったライン・フランクなどである[62]。

アラマンニ族も，その名の通り，非常に多くの小部族集団から成っていたとみられる。ライン川上流とドナウ川上流に挟まれたアグリ・デクマテスの地域で，スエウィ族を中心に形成されたとみてよい[63]。ただし，このスエウィ族はタキトゥス『ゲルマニア』に書かれたものとはすでに異なっていた[64]。上述のストラスブールの戦いにおいてユリアヌスと戦った数多くの王たち，彼らはアラマンニ族の名の下に包含された小部族の指導者であったとみられる。王たちの指導するユトゥンギ族，レンティエンセス族，ブキノバンテス族などの小部族集団が，アラマンニ族連合体を形成していた。

こうした部族の指導者，王は，タキトゥスの描いた時代のゲルマニアの王とは性格を異にしていたことも，今日明らかになっている。古くからの祭司王的な存在から軍指揮者としての王へと変わっていたのである[65]。ゴート族の場合，軍事指導は王から王を凌ぐ権力者（キンディンス　kindins）へと移っていた。332年にかのコンスタンティヌス大帝はゴート族と戦って勝利を収め，条約を結んで，以後約30年間に渡るローマとゴートとの平和を実現したが，この時大帝の講和条約締結の相手となったゴート族，テルウィンギの指導者は，軍事指導者キンディンスのアリアリックであり，アリアリックの息子アオリックはコンスタンティノープルで暮らすこととなる[66]。

フランク族についてもアラマンニ族についても，統一的な勢力では全くなかった。また，両者とも，個別の集団ごとにであるが，ローマとの間で協力関係を取り結ぶことに何ら躊躇はなかったであろう。ローマ側もまた，長らくそうした人々との交流を，「境界」「国境」としてのライン川，あるいは防壁（リメス）の存在とは関係なく，継続してきたのであった。ユリアヌスと対決することになった皇帝コンスタンティウス2世が，条約を結んでいたアラマンニ族の王ウァドマリウスにユリアヌス阻止を依頼したとみられる[67]のも，こうした観点からみれば理解できないことではない。ユリアヌス死後の365年にユリアヌスの親族と思しきプロコピウスが皇帝ウァレンスに対して反乱を起こした時，彼がゴート族のテルウィンギの援軍を期待できたのは，上述の332年の講和以来のコンスタンティヌス朝との関係ゆえであった[68]。従って，ユリアヌスの軍事行動は，そうした伝統的なローマの対応に反したように見える。しかし，そのように解してよいのだろうか。

第4章　第3の「新しいローマ人」

ライン川周辺地域の部族集団とユリアヌスの行動との関係は，軍事面では以上のようにみることができる。すでに述べたように，ユリアヌス自身が皇帝から軍の指揮権を委ねられたと自ら記述するのは357年以降であり，とくにストラスブールで大勝した後であると考えて

よいであろう。それ以前のユリアヌスの行動は，彼の主導でなされた軍事行動ではなく，コンスタンティウス2世の意図に沿って，彼の送り込んだ軍司令官が主導したものであった。コンスタンティヌス大帝死後のライン川周辺地域では，内乱が発生した一時期を除いて，おおむねローマ帝国が威信と軍事力を充分持っていたとみてよかろう。同地におけるユリアヌスの軍事行動も，赴任初期にはコンスタンティウス2世の方策に従った形で実施された。

357年以降，ユリアヌスが軍事権を掌握してのちは，バワーソックが「征服の信奉者」と評した[69]ほどの動きを見せ，コンスタンティウス2世の方針から離れたかのように思われる。ユリアヌスは「蛮族」と戦って勝利を収めただけではなく，『アテナイの人々への手紙』の中で述べている[70]とおりだとすれば，3度ライン川を越え，「蛮族」の捕虜になっていた2万人の人々を取り返し，数多くの町や砦を回復したようである。防衛線の整備もおこなっている。しかし，ユリアヌスがフランク族やアラマンニ族をただ「敵」として攻撃する単純な戦略をとっていたようにみることは誤りであろう。すでに述べたようなフランク族の一派，サリイ族をトクサンドリアに居住することを認めたような政策をおこなっていた。

さらに重要な点は，フランク族やアラマンニ族の出身者を登用して，顕著な地位に就けていたことである。その代表的な人物はフラウィウス・ネウィッタ[71]であろう。フランク族出身のネウィッタは，358年のアラマンニ族連合体の中のユトゥンギ族との戦いでローマ軍人として活躍し[72]，騎兵長官となった。ユリアヌスとともに東へ行軍してコンスタンティノープルに到達した。ユリアヌス即位当初のかのカルケドン会議のメンバーとなり，362年にはコンスルに就任。ユリアヌスの東方遠征にも同行している。アンミアヌスはネウィッタを粗暴で無教養な人間として描いているが，それは彼がフランク族の出であることとは無関係で，個人の問題として理解されるべきである。ネウィッタとともに引き合いに出される人物で，ユリアヌスに昇進させられた者としてダガライフス[73]がいるが，この者も「蛮族」出身であるとみてよい。ガリアより東方へユリアヌスに同伴し，次のヨウィアヌス帝下で騎兵長官に出世し，アラマンニ族との戦いを指揮して，366年にはコンスルにまで到達している。ちなみに，362年にネウィッタとともにコンスルに就任し，ユリアヌスに就任感謝演説を残したクラウディウス・マメルティヌス[74]も属州ガリア出身である[75]。ガリア時代からユリアヌスを助け，歩兵長官を務め，カルケドン会議にも出席したアギロ[76]は，アラマンニ族の出身[77]である

フランク族の出でユリアヌスに仕えた者としてこれまでも注目されてきた人物は，フラウィウス・テウトメレス[78]である。彼とその子リコメレス[79]は，ユリアヌスの私淑したアンティオキアの修辞学者リバニオスと交友関係があった。リコメレスはグラティアヌス帝の下でゴート族と戦い，384年にコンスルとなった。テウトメレスの子孫は皇帝家まで到達する。彼のもう一人の息子フラウィウス・バウト[80]は385年にコンスルになり，その娘エウドクシアは東帝国の皇帝アルカディウスの妻となった[81]。法典で有名な東ローマ皇帝テオドシウス2世は，彼女の産んだ子である。

こうした「蛮族」出身の軍事エリートの台頭は，紀元3世紀以前にもみられないわけではないものの，大きな転機はコンスタンティヌス大帝の時代であった。大帝は，ローマ市でのマクセンティウスとの戦闘に勝利したのち，それまでの近衛隊を解散して新しい部隊を編成し，それに「ゲルマン人」を登用，重く用いたからである。ゾシモスは，大帝の軍事力を支えたのが「ゲルマン，ケルト，ブリトン」の人々であったと記す[82]。324年にコンスタンティヌスがリキニウスと単独支配をかけて戦ったときに活躍したボニトゥスはフランク族出身で，355年にケルンの地で皇帝を僭称した先述のシルウァヌスの父親である。アンミアヌスは「コンスタンティヌス大帝は初めて蛮族にコンスルの衣装を付けさせるまで昇進させた」[83]と述べている。

アンミアヌスは，シルウァヌスがケルンで反旗を翻した355年の事件を叙述する中で，「フランク族の者たちはその当時すでに宮廷に大勢いて，影響力を持っていた」[84]と記す。ユリアヌスの副帝時代には，かつてローマ軍と戦った過去を持つライン沿岸地域の部族の出身で，帝国内で働き次第に昇進を遂げて国家の中枢部にやって来た人々が少なからずいたと考えてよいであろう。かのロナルド・サイムは，帝政初期にローマ帝国中央政府に参入してくるイタリア地方都市や属州都市出身の上層市民を「新しいローマ人」と呼んだ[85]。ローマ人の故地である首都やイタリアを中心にみる価値観からすれば「成り上がり」と見なされるような新興勢力の台頭は，紀元1世紀の南フランス出身の将軍ユリウス・アグリコラ（史家タキトゥスの岳父）のような人々ばかりでなく，3世紀の政治的混乱の時代にもいた。この時代のローマ帝国を牽引し，帝国の分裂を回避させた軍人皇帝たち，ドナウ・バルカン地方出身の軍人政治家たち（井上文則氏のいう「イリュリア人」[86]）がそうであり，彼らを第2の「新しいローマ人」ということができよう。そして，この紀元4世紀に台頭してきたフランク族，アラマンニ族などの「新しいゲルマン人」出の勢力を，第3の「新しいローマ人」と呼ぶことも可能である。

こうしたローマ帝国統治に関わるようになった「蛮族」出身の人々について，そのアイデンティティのあり方が問題になるかもしれない。彼らは自らをどのように理解していたのか。「ローマ人」としてか，あるいは「フランク族の者」「アラマンニ族の者」と意識していたのか。この点ですぐ想起されるのが，たいへん有名な3世紀の1ローマ軍兵士の墓碑の文句，Francus ego cives, miles romanus in armis[87]である。ここからは，この者が「フランク」と「ローマ」の二重のアイデンティティを持つことが指摘されてきた。また，そのアイデンティティの不確かさや可変性など，解釈の難しい点も指摘されている[88]。ここではこの問題について本格的に論じるゆとりはない。ただ，パトリック・ギアリがこの墓碑を結局ローマ軍自体の「蛮族化」の始まりを示していると解している[89]ことについては違和感を覚える。また，M・ヴァアスがすでに1965年の著書で，4世紀の「ゲルマン系」軍人のローマ軍に占める役職を調査して，コンスタンティウス2世以降の軍事長官職に占める「ゲルマン系」の多さを明らかにしているが[90]，本章で筆者が述べたいことは，ヴァアスと同じような軍隊

の，あるいは帝国の「ゲルマン化」ではない。むしろ，ローマ帝国の史的展開を考えるにあたって，「ローマ」対「ゲルマン」といった見方を持ち込むべきではないということを強調したいのである。

私見では，ローマ帝国は，（イタリア出身者を基準に置いたような）「ローマ人」と「他者」という単純な構成，ないし「ローマ人」と「他者」という純粋なカテゴリの接合体ではない。いわばハイブリッドな構造物である。ローマ帝国は，ラインを越えて帝国領住民となった者は「ローマ人」として扱う。ライン川の彼岸の住民との間でも，平時の交流は穏やかにおこなわれ，彼らはローマ帝国の住民となる候補者であった。そもそもローマは，アウグストゥス時代以来，いわゆる「ゲルマン人」を軍隊に採用してきたし，しばしば集団で移住もさせてきた。ライン川，そしてドナウ川は，現代の2国を厳格に分かつ「国境」と異なり，曖昧な存在であった。それをローマ帝国は融通無碍に利用してきたのである。

すでにブリテン島の場合について論じたことがある[91]が，帝国の辺境地帯における「ローマ人」と「他者」の境は非常に曖昧であったと筆者は考える。ローマ帝国にとって，ローマ人にとって，真の「他者」「敵」は東方にあった。少なくとも帝国はそのように表現していた。ラインやドナウの彼岸はそうした東方とは区別される人々の世界である。ユリアヌスの時代には，ラインの彼岸の人々が帝国の本質的な敵としてはまだ認識されていなかった。そして，ユリアヌスは，皇帝に推戴されてのち，ガリアとライン辺境の空間が与える人と力をともなって東へと向かったのである。

展望　――結びにかえて――

ユリアヌスは，360年のおそらく2月にパリで部下の兵士たちに皇帝と歓呼され，まもなくこれを受諾して，東方にある皇帝コンスタンティウス2世と対決するようになる。このパリでの登位まで，彼はガリアとライン沿岸で熱心に統治のために活動した。P・アタナシアディ＝ファウデンは1981年刊行の著書，そして1992年刊行の改訂版においても，ユリアヌスの統治のおかげでガリアは短いがルネッサンスを経験することができたと記している[92]。ユリアヌス自身の言い分や彼を英雄視するアンミアヌスの記述に従えば，そのような表現も可能かもしれない。しかし，この解釈はユリアヌス赴任時にガリアが荒廃していたとする見方を前提にしているのであり，その意味では適切ではないことになる。

資料的な限界もあり，属州や辺境地域の実態には不明確なところが多いが，ユリアヌスの副帝時代のライン沿岸地域を中心とする帝国辺境の状況は，さしあたり以上のようであったと考えられる。この地方が激震を経験するのは，多くの部族が同時にラインを越えた367年である。しかし，その後もなお，コンスタンティウス2世帝時代に似た状況に戻っていると筆者はみている。ローマ帝国にとって，真の「敵」は東方にあった。ライン・ドナウの彼岸はそうした東方の敵とは区別される人々の世界であり続けた。ローマ人のこうした見方を

変えたのは，378年のアドリアノープルの戦いにおける帝国軍の大敗北であると筆者は考える。この事件以後の激動は，帝国統治に与る人々に，ライン・ドナウの彼岸の人々がもはやそれまでとは異なる，東方のペルシアと同じくらい困難な「敵」，真の「他者」になったということを，次第に認識させていったに違いない。

註

1）ユリアヌスに関して今日でも有効なビデ（J. Bidez）以来の研究史や文献については，中西恭子「アンティオキア市民のみたユリアヌス治下の『宗教と祭儀の復興』」『エイコーン』24，2001年，96-98ページや南雲泰輔「ユリアヌス帝の意識の中のローマ皇帝像」『西洋古代史研究』6, 2006年，34ページ，およびそこにあげられた欧文文献をまずは参照されたい。秀村欣二氏によるユリアヌス関係研究書の書評も有益である。『西洋古典学研究』28，1980年，129-134ページ，および『西洋古典学研究』34，1986年，130-133ページ。

中西，南雲両氏の論文の記載文献より後のユリアヌス関連書としては，K. Bringmann, *Kaiser Julian*, Darmstadt, 2004; K. Rosen, *Julian: Kaiser, Gott und Christenhasser*, Stuttgart, 2006 および R. Malcolm Errington, *Roman Imperial Policy from Julian to Theodosius*, Chapel Hill, 2006 をあげるに留める。ただし，次の学術誌がユリアヌスとその時代の特集号となっていることを特記しておきたい。*Antiquité tardivé* 17（2009）: L'Empereur Julien et son temps.

ユリアヌスに関わる研究上の様々な問題点と史料を紹介した便利な研究入門的書物 S. Tougher, *Julian the Apostate*, Edinburgh, 2007 が出ているが，これについては，南雲泰輔氏の紹介文が『史林』に掲載されている。『史林』91-4，2008年，148-149ページ参照。史料については，まずは G.W.Bowersock, *Julian the Apostate*, London, 1978 の第1章（pp.1-12 日本語訳では，新田一郎訳『背教者ユリアヌス』思索社，1986年，13-27ページ）を読むことからスタートし，個々の作品の注釈書・研究書に進むのがよかろう。

2）ユリアヌスの誕生年については明確でないところがある（S. Tougher, *op. cit.* p. 12 参照）が，ここでは D. Kienast, *Römische Kaisertabelle*, Darmstadt, 1990, S.318 に従う。

3）秀村欣二「『背教者』ユリアヌスの精神形成—ユリアヌス研究序説」『歴史と文化』1（歴史学研究報告第1集）1952年，153-167ページ；同「『ガリラヤ人よ，汝は勝てり！』背教者ユリアヌスとキリスト教」民主主義科学者協会歴史部会『世界歴史講座』1，三一書房，1953年，153-186ページ；同「『背教者』ユリアヌスと古代末期世界観」『歴史と文化』3（歴史学研究報告第6集），1958年，83-100ページ；同「『背教者』ユリアヌスの宗教政策」荒井献・川島重成編『神話・文学・宗教』教文館，1977年，211-242ページ。なお，以上の秀村論文については，本稿では同氏の選集に再録されたものから引用する。『秀村欣二選集』4，キリスト教国書出版会，2006年；長友栄三郎『キリスト教ローマ帝国』創文社，1970年，85-139ページ；中西恭子「ユーリアーヌス帝の宗教復興構想のなかの『祭儀』」『東京大学宗教学年報』17，1999年，127-144ページ；同「アンティオキア市民のみたユリアヌス治下の『宗教と祭儀の復興』」『エイコーン』24，2001年，79-103ページ；同「ユリアヌスの宗教思想における『ヘレニズム』とキリスト教」『中世思想研究』44，2002年，55-68ページ；南雲泰輔「ユリアヌス帝の意識の中のローマ皇帝像」『西洋古代史研究』6，2006年，19-39ページ。

4）秀村欣二『秀村欣二選集』4，167-168ページ。

5）同，168-169ページ。

6）G.W.Bowersock, *op. cit.*

7）D. Hunt, The successors of Constantine, A. Cameron and P. Garnsey（eds.）, *The Cambridge Ancient History,* 2nd ed. vol. 13, Cambridge, 1998, pp. 1-43 ; id., Julian, Cameron and Garnsey, *op. cit.*, pp.44-77.

8）P. Athanassiadi-Fowden, *Julian and Hellenism: An Intellectual Biography,* Oxford, 1981, p. 54.

9）Zosimus, *Historia Nova* , 3,1.

10）S. Mitchell, *A History of the Later Roman Empire AD 284-641*, London, 2007, p.72.

11）J.F.Drinkwater, "The Germanic Threat on the Rhine Frontier": a Romano-Gallic Artefact? R. Mathisen & H.S. Sivan (eds.), *Shifting Frontiers in Late Antiquity*, Aldershot, 1996, pp.20-30; id., *The Alamanni and Rome 213-496*, Oxford, 2007.

12）一例として，P. Heather, *The Fall of the Roman Empire. A New History of Rome and the Barbarians*, Oxford, 2006 をあげておこう。この書物については，『西洋古典学研究』56，2008 年，142-145 ページ掲載の拙評を参照されたい。また，こうした解釈の傾向については，次の井上文則氏の説明もあわせて参照されたい。井上文則「ローマ帝国衰亡論の現在」，南川高志編「ローマ帝国の『衰亡』とは何か」『西洋史学』234，2009 年，66 ページ。

13）Eutropius, *Breviarium*, 9,23 ; *Panegyrici. Latini*, 8, 21, 1; 10, 7.

14）Hunt, The Successors of Constantine, Cameron and Garnsey, *op. cit.*, p.6.

15）Ibid., p.10.

16）Ibid., p.14, n.47 ; Kienast, *op. cit.*, S. 314.

17）P. Southern & K. R. Dixon, *The Late Roman Army,* London, 1996, p. 48.

18）Hunt., op. cit, pp.16-17.

19）M. Carroll, *Romans, Celts & Germans: The German Provinces of Rome*, Stroud, 2001, p. 141.

20）L. Warser (hrsg.), *Die Römer zwischen Alpen und Nordmeer*, Mainz, 2000, S. 208.

21）Ammianus Marcellinus, *Res Gestae* (以下 AM と略記), 14,5.

22）AM, 14, 10.

23）Aurelius Victor, *De Caesaribus.*, 42, 15.

24）アンミアヌスに関しては，記念碑的研究 J. Matthews, *The Roman Empire of Ammianus*, Ann Arbor, 1989（new edition 2007）以来，数多くの研究が発表されており，注釈作業も進んでいるが，紙幅の関係で，ここでそれらを列挙することは控える。

25）正確には『アテナイのブーレーとデーモスに宛てた手紙』。簡単に利用できるテクストは，Loeb Library の *The Works of the Emperor Julian* vol. II, London, 1913 所収のものとその英語訳である。本稿での引用はこれに拠る。

26）『アテナイの人々への手紙』277D.

27）AM, 15, 8, 1.

28）Eunapius, *Vitae Philosophorum ac Sophistarum*, 戸塚七郎訳　エウナピオス『哲学者およびソフィスト列伝』京都大学学術出版会，2001 年。

29）前註記載の戸塚訳所収の戸塚氏による解説 402-407 ページ。

30）Eunapius, *op. cit.*, 476. 戸塚訳　292 ページ。ただし，同訳の 293 ページの註 2 の説明は小アジアの「ガラティア」そのものを説明しており，ユリアヌスの任地とは異なる。

31）AM, 15, 8, 19

32）『アテナイの人々への手紙』278D.

33）『アテナイの人々への手紙』279B.

34）Bowersock, pp. 36-37. 新田訳では 64-69 ページ。

35）Hunt, Julian, Cameron and Garnsey, *op. cit.*, p. 49. この問題については，Tougher, *op. cit.*, p.32 も見よ。

36）W. Eck, *Köln in römischer Zeit*, Köln, 2004, S. 654. 考古学情報を踏まえた註 20 記載の L. Warser (hrsg.), *op. cit.*, S.463 も 355 年説を採っている。

37）AM, 16, 4.

38）AM, 16, 7.

39）AM, 16,12.

40）『アテナイの人々への手紙』278D.

41）バルバティオはユリアヌスの兄ガルスの仇敵であったが，この退却がユリアヌスを陥れようとする皇帝の奸計と解釈することは不適切であろう。バルバティオ自身をも危険に曝す行為であったからである。Bowersock, *op. cit.*, p.41. 新田訳では 75 ページ参照。

42）Eunapius, *Histr.*, fr. 9. ただし，Athassiadi-Fowden, *op. cit.*,p. 58, n. 32 と Hunt, op.cit., p.51 に拠る。

43）AM, 16, 63.
44）AM, 16, 12, 64.
45）Hunt, op. cit., p. 54.
46）AM, 17, 2; Bowersock, *op. cit.*, pp42-43. 新田訳では 77-78 ページ。Hunt, Julian, pp.53-54.
47）ユリアヌス自身も言及する。『アテナイの人々への手紙』280B.
48）AM, 17, 8, 3.
49）このことは，かの *Panegyrici Latini* などを史料として古くから知られている。A・ドプシュ（野崎直治・石川操・中村宏訳）『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎』創文社，1980 年（原著の決定版である第 2 版の出版は 1923-1924 年），113 ページ，243 ページ。最近では，M. Carroll, *op. cit.*, p.143 ; M. Todd, The Germanic Peoples and Germanic Society, *The Cambridge Ancient History,* 2nd. ed. Vol.12, 2005, p.444.
50）M. Carroll, *op. cit.*, p.144.
51）AM, 17,8 ; 18,2,3.『アテナイの人々への手紙』280A では，600 隻集めたが，そのうち 400 隻は自分が造ったとユリアヌスは記している。Zosimus, *Historia Nova* , 3, 5 では，ユリアヌスが 800 隻の船を造らせたとする。Bowersock, *op. cit.*, pp42-43（新田訳では 77-78 ページ）では，200 隻から 400 隻に増えたと解されている。
52）AM, 16,12, 3 ; Bowersock, *op. cit.*, p. 41（新田訳では 75-76 ページ）.
53）『アテナイの人々への手紙』279D-280B.
54）AM, 18, 2, 4-5.
55）セルディカ（現ソフィア）のコラムにある碑銘。Dessau, *ILS*, 8945.
56）「ゲルマン人」「ゲルマン民族」についての研究史や動向をここでたどる紙幅の余裕はない。さしあたり，簡単な紹介を読むことができる近年の出版物を掲げておこう。Walter Pohl, *Die Germanen,* München, 2000; M. Todd, *Migrants & Invaders. The Movement of Peoples in the Ancient World*, Stroud, 2001, pp. 11-18; M. Kulikowski, *Rome's Gothic Wars from the Third Century to Alaric*, Cambridge, 2007, pp.43-70; Guy Halsall, *Barbarian Migrations and the Roman West, 376-568*, Cambridge, 2007, pp. 3-62.
57）R. Wenskus, *Stammesbildung und Verfassung. Das Werden der frühmittelalterlichen Gentes*, Köln, 1961.
58）いわゆる「ゲルマン部族国家」の理解に関しては，佐藤彰一氏による紹介を参照。佐藤彰一「古代から中世へ」『岩波講座　世界歴史』第 2 版 7，岩波書店，1998 年，17-21 ページ； 同『ポスト・ローマ期フランク史の研究』岩波書店，2000 年 ; 同『中世世界とは何か』岩波書店，2008 年。日本語で読める関連の書物としては，P. J. Geary, *The Myth of Nations: The Medieval Origins of Europe*, Princeton, 2002 の日本語訳，鈴木道也・小川知幸・長谷川宜之訳『ネイションという神話』白水社，2008 年が有用である。英語やドイツ語による「ゲルマン」研究は枚挙にいとまがないほどあるが，信頼でき，手軽に利用できるものとして，以下の 3 点のみここでは挙げる。H. Wolfram（transl. by Th. Dunlap）, *The Roman Empire and Its Germanic Peoples,* Berkeley, Los Angeles & London, 1990; W. Pohl, *op. cit.* ; M. Todd, *The Cambridge Ancient History*, pp. 440-460.
59）南川高志編，前掲論文，62，65-69 ページを参照。
60）こうした解釈の変化については，P・ヘザーの貢献が大きい。ヘザーの研究業績に基づいて，ゴート族に関する解釈の変化を次の論文が紹介しているので参照されたい。足立広明「古代末期地中海世界における人の移動と社会変容」『岩波講座　世界歴史』第 2 版 19，岩波書店，1999 年，201-224 ページ。
61）P. J. Geary, *op. cit.*, p. 81 , pp. 84-85 日本語訳では 112-113 ページ，116-117 ページ。
62）野崎直治「古ゲルマン時代」および渡部治雄「フランク時代」，いずれも成瀬　治・山田欣吾・木村靖二編『ドイツ史』1，山川出版社，1997 年所収，40-42 ページ，および 45-46 ページ。佐藤彰一『中世世界とは何か』35-36 ページ。P. J. Geary, *op. cit.*, pp. 87-88（日本語訳では，119-120 ページ）.
63）佐藤彰一，前掲書，35 ページ。
64）スエウィ族の名称と内実の変化については，さしあたり次を参照されたい。H. Wolfram, *op. cit.*, pp.40-41.
65）佐藤彰一，『ポスト・ローマ期フランク史の研究』第 4 章，および同『中世世界とは何か』，34

ページ。

66）P. J. Geary, *op. cit.*, pp. 87-88. 日本語訳では，119-120 ページ。

67）AM, 16,12,17 ; 21, 3-4.『アテナイの人々への手紙』286A-287B.

68）Geary, *op. cit.*, pp.87-88. 日本語訳では 120 ページ。

69）Bowersock, *op. cit.*, p. 43. 新田訳では 78 ページ。

70）『アテナイの人々への手紙』280C-D.

71）A.H.M. Jones, J.R.Martindale & J. Morris, *The Prosopography of the Later Roman Empire*, vol. 1, Cambridge, 1971 (以下，*PLRE* と略記する), pp.626-627.

72）AM, 17, 6, 3.

73）*PLRE*, p. 239; W. Hamilton (selected and translated), *Ammianus Marcellinus: The Later Roman Empire*, London, 1986, p. 480.

74）*PLRE*. pp. 540-541.

75）E.J. Kenney & W.V. Clausen, *The Cambridge History of Classical Literature* vol. 2, Cambridge, p.75.

76）*PLRE*, pp.28-29.

77）AM, 14, 10, 8.

78）*PLRE*. p.886.

79）*PLRE*, pp.765-766.

80）*PLRE*. pp.159-160

81）4 世紀におけるフランク族出身者のローマ政界への台頭は，佐藤彰一『岩波講座　世界歴史』所収論文，7 ページに指摘されている。

82）Zosimus, *Historia Nova*, 2,15,1.

83）AM, 21,10, 8.

84）AM, 15, 5, 11.

85）R. Syme, *Tacitus,* 2 vols, Oxford, 1958 ; 南川高志『ローマ皇帝とその時代――元首政期ローマ帝国政治史の研究』創文社，1995 年，第 1 部第 3 章，とくに 122-124 ページ。

86）井上文則『軍人皇帝時代の研究』岩波書店，2008 年。

87）Dessau, *ILS*, 2814。「私は，市民としてはフランクで，武器を取ってはローマの兵士であるが，・・・」この一文の「市民」という意味は理解が難しい。後藤篤子「帝政後期ガリアに見るローマとゲルマンの共生」『歴史学研究』716，191-192 ページでの議論の紹介を参照されたい。

88）後藤篤子，前掲論文，192 ページ。

89）P. J. Geary, *op. cit.,* p. 85（日本語訳では 117 ページ）. もっとも，ギアリは，この点を自身の調査でなく他の研究者の成果に依拠したうえで，見解を述べている。Geary, *op. cit.*, 179 n.7（日本語訳では註の 15-16 ページ）.

90）M. Waas, *Germanen in römischen Dienst im 4. Jh. n. Chr.*, Bonn, 1965.

91）南川高志『海のかなたのローマ帝国――古代ローマとブリテン島』岩波書店，2003 年。

92）Athassiadi-Fowden, *op. cit.*,p.60.　題名を改めた新版は id., *Julian: An Intellectual Biography*, London & New York, 1992.

【付記】本稿は，平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（代表　南川高志）による研究成果の一部である。

The Kyoto Journal of Ancient History, Vol.10 (2010)

《English Summary》

Julian in Gaul

Takashi MINAMIKAWA

Julian was proclaimed as Augustus by his army in Paris early in 360. Modern scholars have considered that Gaul was devastated by the *barbarians* at the time of his arrival as a Caesar. And they have emphasized that Julian's successful operations against *the barbarians* and his recovery from the poor condition of the province resulted in the proclamation. But some scholars doubt the pro-Julian interpretation of the political process in Gaul and regard the barbarians' attack as of little serious problem.

In this paper, the author tries to re-examine the real condition of Gaul and the Rhine frontier before Julian's arrival and his military activities there. He also attempts to take the recent discussion on the identity of Germanic tribes in the political history of the 4th century. According to his research, Gaul and the Rhine frontier were stable under the Roman rule about the mid-fourth century.

At a glance, Julian's military activities seem to be warlike and different from these of the previous emperors. Julian, however, did not regard Frankish and Alamannic people as *enemy* or *others*. He took and promoted their elites into his army and his government.

At the end of this paper, the author shows his perspective that the Roman frontier policy kept its flexible character to accept the frontier people until the battle of Adrianople in 378.